

「若者の問題か、社会の問題か。」

毛利 優美

みなさん、こんにちは。私は十八歳になって以降、今までの選挙には全て投票してきました。これから話す内容はその私からの視点で述べていこうと思います。

選挙と聞いて多くの人が一番に思い浮かぶのは『低い投票率』だと考えられます。私もそう考えた一人です。特に、テレビや新聞では、若者の投票率の低さが問題視されています。しかし、それは若者が悪いと言い切れるのでしょうか。総務省のホームページによると、令和元年七月に行われた参議院議員通常選挙では、十代の投票率は約三十二パーセント、二十代の投票率は約三十一パーセントでした。確かにこれだけ見ると、若者の投票率の低さが伺えます。ではなぜ、若者の投票率が低いのでしょうか。これに関して、私は三点の原因が挙げられると考えます。

まず一点目は、テレビで報道される際、政策について扱う番組の少なさです。現在の若者のほとんどは、テレビや携帯電話にて情報を得ます。しかし、そのテレビでは「投票をしましょう」と言うばかりで、各党の政策を紹介しようとはなかなかしません。その結果、若者は政策を知ることなく、無責任な投票は避けようと投票しないという選択肢を取るのです。そして選挙後は、投票率の低さばかり問題視するという悪循環が続いているのです。それを若者の選挙離れと一概にまとめられては、若者としても納得がいきません。これに関して一つ提案するとするならば、インターネットを使った選挙活動が挙げられると思います。しかし、なかには政策を知っていても投票をしない若者もいます。ここで問題になっているのが次の二点目です。

二点目は、高齢者向けの政策に偏っているということです。これに関しては、政党側の気持ちも想像は容易に出来ます。投票率の低い若者向けの政策を提案するよりも、投票率の高い高齢者向けの政策を提案する方が少しでも当選確率を上げられるからでしょう。しかし、自分に徳がないのに、わざわざ投票所まで行って投票しようという人が大多数もいるのでしょうか。実際、それでも投票を行っているのが、十代・二十代ともに全体の約三十パーセントを占めているのだから、寧ろ多い方だと私は思います。

三点目は、選挙そのものに知識がないということです。これまでの二点では、若者の投票率の低さは、社会や政党にも責任があると述べてきました。しかし、それでも十代・二十代ともに約三十パーセントもの人が投票しているのですから、残りの七十パーセントの人でも何か楽しみが見つけられれば、きっと投票

率も上がるはずです。では、その楽しみとは何か。これは私の経験であり、楽しみと捉えられるかは人によると思いますが、紹介してみようと思います。私が中学生の頃にある教育実習生が言っていたことを、私は今でも覚えています。その教育実習生は、選挙がある際には、必ず朝早くに投票所へと行くそうです。なぜなら、投票を行う最初の人、その投票所にある投票箱が空だということを確認するからです。それを聞いて、私も「確認してみたい」と思い、実際に二回目の選挙の際には朝五時に起き、一人投票所へと向かいました。しかし、その日は警報が出る程の大雨の日で投票所に着いてから「投票は三時間後に延期されました」と伝えられ、一度帰宅したので、きっと一生忘れることのない経験になりました。結果的には、同じ地区のおじさんに僅差で勝ち、投票箱の中身を確認することができました。並んでいるところに「では一番の方」と呼ばれ、一人中へ入り、選挙委員の方とともに投票箱の中身を確認し、確認が出来次第、投票していくという流れでした。私は大学に入り、このことを数人の友人に話しましたが、『投票が最初の人、投票箱の中が空だと確認する』ということを知っている人は一人もいませんでした。こういった選挙・投票そのものには関係のないことでも、大人が子どもに対して教えるということは、社会の目指す若者の投票率向上に繋がるのではないのでしょうか。

これまで述べたように、若者の投票率が低いことに関して「若者の選挙離れ・投票離れ」と片付けるのではなく、なぜ投票率が低いのかということに着眼点を置く必要があると私は思います。選挙に関する問題は、ある特定の年代に限った問題なのではなく、日本社会全体の問題なのですから。ご清聴ありがとうございました。